

# 異文化経験に関する現象学的社会学-中国人留学生 における下位世界と社会化-

著者	王 云
号	16
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	情博第493号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59897">http://hdl.handle.net/10097/59897</a>

氏名（本籍地）	WANG YUN 王 云
学位の種類	博士（情報科学）
学位記番号	情博第493号
学位授与年月日	平成22年 9月 9日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科（博士課程）人間社会情報科学専攻
学位論文題目	異文化経験に関する現象学的社会学—中国人留学生における下位世界と社会化—
論文審査委員	（主査）東北大学教授 小林 一穂 東北大学教授 竹内 修身 東北大学教授 正村 俊之 東北大学准教授 徳川 直人 （文学研究科） 東北大学准教授 河村 和徳

## 論文内容の要旨

### 第一章 本稿の課題・対象・方法

グローバル化の趨勢が強まる中、異文化の中で生活経験を持つ人が多くなっている。このようなことは社会にいかなる影響を与えるのだろうか。

最近のエスニシティやマイノリティの研究においては、異国での生活経験によるアイデンティティの変化が注目されるようになっている。その中でも戴エイカ（1999）の研究は重要な先行研究だと思われる。戴は他の集団での生活経験がアイデンティティにどのような変化をもたらしてきたかを明らかにした。生活経験者は古いナショナル・アイデンティティにとって変わった新しいアイデンティティを持つようになっている。新しいアイデンティティとは、ディアスポラのアイデンティティであったり、ハイブリッド性を持つナショナル・アイデンティティだったり、ナショナル・アイデンティティという次元を超え、「人間」という枠組だったりするものである。また、異文化経験者は新しいアイデンティティを持って、もとのナショナル・アイデンティティに内在する「他者」への排除の原理に批判的なまなざしを向けるようになっている。この論考は異文化経験論において、異文化経験およびそれがアイデンティティや思考にもたらす変化を考えるにあたり、重要な示唆を提示している。

しかし、戴においては、「透明的なアイデンティティ」を持っていた人々への考察は少ない。また、他の集団での日常生活の経験とはどのようなものなのか、それがなぜアイデンティティや考え方を变化させるのかについての考察が少ない。

そこで、本研究では、日本における中国人留学生を対象として取り上げ、他の集団での経験は

どのような経験なのか、他の集団で生活している人々は日常生活の経験の中で、アイデンティティおよび考え方がいかに変化させていくのかを明らかにする。

この課題を解決するにあたって、異文化経験論の古典と思われるA・シュッツの「よそ者」論が非常によい分析枠組を提示していると思われる。とはいえ、シュッツの「よそ者」論はよそ者が集団生活の文化的パターンに近づいていく様子を考察しているが、この集団生活の文化的パターンに対しては、一枚岩的なものとして取り扱っているように思われる。そのため、「下位世界」という視点を持っているバーガーとルックマンの「第二次的社会化」論と「主観的現実」論をも本稿の分析枠組として取り入れる。

## 第二章 「よそ者」

### ——A・シュッツの「よそ者」論文再考——

第二章においては、よそ者がどのように接近集団の文化的パターンに接近していくかという観点から、シュッツの「よそ者 The Stranger」論文を検討した。

シュッツによれば、よそ者にとって、集団生活の文化的パターンは探求の課題である。他集団の成員との接触によって、「日常的思考」に限界を感じる。よそ者は接近集団の文化的パターンの解釈機能についての知識を収集し、それを自分自身の表現図式として採用し、接近集団の成員と社会関係を作ろうとする。しかし、よそ者は観察した行為の特徴が「類型的な特徴」なのか、「個人的な特徴」なのかをしばしば判断できない。「かくしてよそ者は擬似的匿名性、擬似的親密性、擬似的類型性からなる社会的世界を構成する」(Schutz [1944] 1964 : 102=1991 : 147)。よそ者はそれをもって、接近する集団の成員と相互行為をするので、なかなか期待通りにはならない。その結果、「距離感覚を失い、疎遠さと親密さの間を揺れ動き、躊躇し、確信が持てなくなる。また、ただ従うだけでよく、理解する必要のない疑問視されない処理法の有効性に頼っている人々からみれば、きわめて単純明快に思われるあらゆる事柄に対して、よそ者は不信の気持ちをもつのである」(Schutz [1944] 1964 : 103-104=1991 : 147-8)。

シュッツによれば、よそ者は批判的な態度で接近集団の文化的パターンを見ているが、「日常的思考」の限界の経験により、もとの集団の文化的パターンを維持したままでもない。よそ者はもとの集団の文化的パターンにも、新しい集団の文化的パターンにも距離を持って、「相対的に自然な世界観」の全基盤について検討していく態度を持っているのである。

## 第三章 第二次的社会化と下位世界

第三章においては、バーガーとルックマンの第二次的社会化論および主観的現実論を検討した。

バーガーとルックマンにおける第二次的社会化論は大きく言って、二つの事項から成り立っている。すなわち、まず第一に、内在化される対象世界はどのようなものなのかについてである。そして、第二に、その対象世界がいかに内在化されるのかということである。第二次的社会化において内在化される対象は「下位世界」である。この概念の対概念は、〈基本的世界〉(Berger and Luckmann 1966=2003 : 210)である。第一次的社会化において、個人が「一般的に有意性をもつ知識」(Berger and Luckmann 1966=2003 : 210)の獲得により、〈基本的世界〉が内在化され、社会の成員となる。それに対して、第二次的社会化において、個人が〈特殊な知識〉の獲得により、「下位世界」が内在化され、その社会のある部門の成員となる。下位世界の知識は技能的なも

のや、規範、価値、情緒的なものなどさまざまな層が含まれている。下位世界の語彙を習得することにより、下位世界の知識を獲得し、下位世界が内在化され、社会の部門としての同下位世界の成員となる。

主観的現実論は大きく言って、二つの事項から成り立っている。すなわち、一つは主観的現実の維持であり、もう一つは主観的現実の変化である。主観的現実の日常的な維持は、その現実を確認できる信憑性構造の中で、重要な他者との会話を保持し続ける限りにおいてのみ維持しうる。主観的現実の変化の手続きは、意味ある他者を仲介する新しい現実の信憑性構造の構築、新しい現実の知識体系の樹立、全過程の正当化装置および古い現実の無効化装置の構築が含まれている。

#### 第四章 留学経験に関する文書資料の分析

##### ——『日本留学一千天』を対象として——

本章では第三章で検討した第二次的社会化という観点から、『日本留学一千天』（小草 1987）に記述されている日本における中国人留学生の経験に対して再解釈を行っている。

第二次的社会化という視点から、小草の日本における留学経験を下位世界ごとに見てきた結果、以下の知見を得た。

小草はアルバイト先においては、「重要な他者」である店長などの案内を受け、元の集団の文化的パターンの知識を活かしながら身につけていく。さまざまな困難があるが、一人前の成員となった。だが、成員となっていく中で、或いは成員でありながら、小草は言語体系や行動パターンの違いにより、「ガイジン」という類型を経験し、他者から中国人として対応されることにより、「中国人」であるという類型をも経験した。

第一次的社会化において身につけた食欲に関する文化的パターンは異常に頑固なものである。新しい食欲の充たし方という文化的パターンに近づいていくのは相当困難なことである。

日本語学校においては、台湾の学生とともに日常生活を送っていく中で、小草は「典型的」な台湾人という把握から進んでその範疇の成員の多様性を理解できるようになった。大学においては、留学生は一つの行動を展開する際に、その行動についての直接の知識は言うまでもないが、大量の周辺の知識、つまり、その行動をめぐる関連性体系についての体系的な知識を収集する必要がある。

#### 第五章 留学経験に関するインタビューを通じた分析

本章では、筆者による留学生の下位世界における日常生活の経験についてのインタビューに基づき考察を加えている。9名の大学院生を対象にして、彼らの日常生活経験、とりわけそれらの経験についての意味づけを中心に、中国語で1名につき2～3時間をかけ、半構造的インタビューを行った。留学生の生活世界を把握できるように、インタビューの項目は下位世界ごとに細かく分けている。また、一項目はさらなる細かい項目から成っている（付録参照）。

本章において、調査の概況を紹介した（第二節）うえで、研究室（第三節）、アルバイト先（第四節）、下宿先（第五節）という下位世界における留学生の生活経験を考察した。また、第六節において、留学生の主観的現実の変化を考察した。

留学生の研究室における経験とアルバイト先における経験は違う経験である。研究室においては、教員及び先輩の案内を受け、彼らの反応を確認しながら、自分の行動図式を修正し、研究に関する文化的

パターンに接近していく。アルバイト先においては、「『強いられた』関連性を『内発的』な関連性に変形させる」という戦略を取って、自分を研究室にいる時と違う類型として提示する。

また、留学生は日本人と下位世界の成員の関係を結びながら、相手を「日本人」として見ることもある。ある物事に関して、自分と違う知識及び関連性構造を持っている、という確認をすることにより類型化を行う傾向がある。留学生がさまざまな下位世界で日常生活を送っていく中で、主観的現実が変化してきた。日本人類型については、来日前と比べて、抽象的なものから具体的なものになっている。逆の類型になっている傾向もある。また、下位世界においては、他の成員とかがわりが多ければ多いほど、交流が深ければ深いほど、自分の状況に関する知識およびそれが基づいている類型化および関連性構造の特徴が自覚され、中国人であるという自己類型を強化される傾向がある。さらに、留学生は中国のさまざまな要素について再解釈を行う。それらの要素は出国する前に主観的現実には存在しなかったものであり、日本での留学経験により、思考の対象となっているものである。

## 第六章 結論——現象学的社会学から見た異文化経験とは何か

第六章では以上の分析を総合して、結論を導出した。留学生はさまざまな下位世界で違う経験をしながら、統一的な異文化集団の類型を形成している。また留学生は自分の元の集団の成員であるという自己類型を強めていくのである。とはいえ、自分の元の集団に対しても新しい視点を用いて、批判的なまなざしを向けていくのである。

## 論文審査結果の要旨

多文化主義が唱えられ、異文化との接触が頻繁となっているなかで、異国での生活経験が当人のアイデンティティにもたらす変化の解明が重要な課題となっている。著者は、現象学的社会学から実証調査のための方法論を抽出することによって、異文化経験の現実を調査実証しようとする。本論文は、その成果をまとめたもので、全編6章からなる。

第1章は序論である。

第2章では、A・シュッツの「よそ者」論文を取り上げ、集団間を移行したよそ者が文化的パターンを変容させる過程の検討をおこなっている。その結果、既成概念が無効となって「日常的思考」の限界が顕わになり、よそ者が「相対的に自然な世界観」を全面的に再審するようになる、という論理を明らかにした。これは、異文化経験が新しい文化との距離だけではなく、もとの文化とも距離をとらざるを得なくなるという論理を明示したものとして評価できる。

第3章では、バーガーとルックマンの『現実の社会的構成』を取り上げ、意味の下位世界の論理を検討している。信憑性構造を基盤とする主観的現実の維持と変化を、第二次的社会化におけるそれとしてとらえる、という論理を取り出した。そして、下位世界を構成する諸概念を実際の異文化経験の分析概念として用いる提案をしている。これは現象学的社会学を基礎として実証研究への橋渡しを試みた成果として評価できる。

第4章では、日本に留学した中国人学生の体験記を対象としたドキュメント分析の結果を示している。これは、現象学的社会学の応用の典型として、高く評価できる。

第5章では、中国人留学生を対象者とした半構造化インタビュー調査の結果を示している。緻密な面接によって留学という異文化経験を明らかにした調査報告として、高く評価できる。

第6章は結論である。

以上要するに本論文は、異文化経験に関し、現象学的社会学から得られた知見に基づき、ドキュメント分析とインタビュー調査という実証研究をおこなって、異文化経験による主観的現実の変容を明らかにしたもので、異文化コミュニケーションならびに情報科学の発展に寄与するところが少なくない。よって、本論文は、博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。